

感染症発生動向調査事業におけるウイルス検出状況（平成 20 年度）

前田 詠里子、森田 美加（平成 21 年 3 月 退職）、斉藤 義治

1 はじめに

熊本市感染症発生動向調査実施要綱に基づく平成 20 年度のウイルス検査の結果について報告する。

2 材料及び方法

熊本市内 6 医療機関（小児科定点 1、インフルエンザ定点 2、基幹定点 3）で採取され、感染症対策課により搬入された髄液、咽頭ぬぐい液及び糞便等の検体 120 検体を検査材料とした。月別・疾患別検体受付数を表 1 に示した。疾患別では感染性胃腸炎が最も多く 60 検体、次いでインフルエンザが 13 検体であり、手足口病は 13 検体と昨年とほぼ同程度が搬入された。

表 1 月別・疾患別検体受付数

臨床診断名	検体数	2008 年										2009 年		
		4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月	
感染性胃腸炎	60	4	6	6	6	2	2	4	14		8	1	7	
インフルエンザ	13										4	4	5	
手足口病	13		1	2	7		2			1				
無菌性髄膜炎	3			1			1						1	
急性脳炎	4	1	1		1						1			
膀胱炎	2									2				
その他の呼吸器疾患	4		2		1		1							
その他の発疹性疾患	10		4		3			1	1				1	
その他の神経系疾患	8		1		3	2		1			1			
その他の循環器疾患	3						1	1				1		
計	120	5	15	9	21	4	7	7	15	3	14	6	14	

検査は、5 種類の培養細胞（Vero、Hep2、RD、Caco2、MDCK）を用いたウイルス分離を基本に、必要に応じて RT-PCR 法、リアルタイム PCR 法、IC 法、ラテックス凝集法及び電子顕微鏡法により実施した。分離されたウイルスは、中和血清を用いた中和試験（NT 試験）、赤血球凝集抑制試験（HI 試験）等で同定した。

3 結果

疾患別ウイルス検出状況を表 2 に、月別ウイルス検出状況を表 3 にそれぞれ示した。分離されたウイルスは 19 種、66 株であった。その内訳を主な疾患別にみると、感染性胃腸炎で 13 種 44 株、インフルエンザを含めた呼吸器疾患で 4 種 13 株、手足口病で 1 種 6 株等であった。

(1) 感染性胃腸炎

2008年はサポウイルスが4検体から検出されたが、昨年度とは異なりG4型は検出されず、G1型が3検体、G2型が1検体から検出された。その他、24検体からノロウイルスGⅡが検出された。検出時期は例年と同様11月以降であった。また、4検体で2種の混合感染が認められたが、そのうちポリオウイルスとの混合感染が見られたものについては時期的にポリオ生ワクチンによるものと推定される。2008年6～8月にかけて6検体からエコーウイルス30型が検出された。

(2) インフルエンザ

インフルエンザウイルスは、当所では2009年1月から2月にかけてAH1型が5株、2月にAH3型が1株、B型が6株分離された。全国的にはAH1の分離報告数は2008年12月に入ってから増加しはじめ、2月をピークにその後減少し、3月以降はB型が報告数を上回っており¹⁾、ほぼ同様の傾向を示した。

(3) 手足口病

2008年5月～9月にかけて、手足口病からコクサッキーウイルスA16型が6株分離された。

参考文献

- 1) 国立感染症研究所感染情報センター：週別型別インフルエンザ分離・検出報告数の推移2008/2009シーズン。IASR(<http://idsc.nih.gov/iasr/prompt/graph-kj.html>)